

Title	京都学派の教育思想における主体概念の研究：高坂正顕・木村素衛を中心に
Sub Title	
Author	山田, 真由美(Yamada, Mayumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.82 (2016.) ,p.180- 183
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000082-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1828,” *History of Education Quarterly* 5, no. 1 (1965): 53–67. また、以下に挙げる諸先行研究は、イエール報告を単に「保守的な文書」として論じる研究に対し、同報告が当時の時代状況に即したカレッジの在り方を提示していたという点を主張する。しかしこうした先行研究においても、ハーバードをドイツ型、イエールをイギリス型として類型化した枠組みを前提としている点で変わりはない。David B. Potts, *Liberal Education for a Land of Colleges: Yale's Reports of 1828* (New York: Palgrave Macmillan, 2010); Michael S. Pak, “The Yale Report of 1828: A New Reading and New Implications,” *History of Education Quarterly* 48, no. 1 (2008): 30–57; Douglas Sloan, “Harmony, Chaos, and Consensus: The American College Curriculum,” *Teachers College Record* 73 (1971): 221–52; Jack C. Lane, “The Yale Report of 1828 and Liberal Education: A Neorepublican Manifesto,” *History of Education Quarterly* 27, no. 3 (1987): 325–38. 尚、このような枠組みに対する反論としては、以下の論文においても述べられている：立川明, 「イエール・レポートからランド・グラント・カレッジへ：ジョナサン・ボールドウィン・ターナーと知の共和国構想の誕生」, 『国際基督教大学学報I-A教育研究』48 (2006) : 1–26; 宮澤康人, 「ハーバード学則改正 (1825) とイエールリポート (1828) : アメリカにおける科目選択制度をめぐる論争の端緒」, 『東京大学教育学部紀要』16 (1977): 1–22.

ii 例えば、原圭寛, 「イエール報告 (1828) の解釈とイエールの戦略：知識の教授を含み込むものとしての「精神の陶冶」」, 『近代教育フォーラム』no. 23 (2014): 283–95.

iii 尚宮澤は、バツの高等教育史研究を引用しつつ、1930年代のリベラル・エデュケーションの代表的論者であるR.M.ハッチンス (Robert M. Hutchins) の言説とイエール報告との間に「思想ばかりでなく用語法についても著しい類似性がある」点を挙げ、同報告の後の世代への影響力の強さを強調している (宮澤, 「ハーバード学則改正とイエールリポート」, 19; Robert F. Butts, *College Charts Its Course: Historical Conceptions & Current Proposals* (North Stanford: Ayer Company, 1972), 292 n. 3). 尚ハッチンスは、イエールの卒業生 (B.A., 1921; LL.B., 1925) であり、イエール・ロー・スクール長を歴任している (1927–29)。

iv ホワイトはイエールのB.A.を1853年に、M.A.を歴史専攻で1856年に取得している。更に名誉学位としてLL.D.を1887年に授与されている。またギルマンはB.A.を1852年に取得している。

京都学派の教育思想における主体概念の研究

——高坂正顕・木村素衛を中心に——

山 田 真 由 美

1 本研究の目的

本研究の目的は、京都学派の教育思想における「主体」概念について、それが歴史において作られながら歴史を作る「歴史的形成的主体」であることを、教育哲学を論じた高坂正顕 (1900–1969) と木村素衛 (1895–1946) の思想において明らかにすることで、歴史哲学の観点から、京都学派の教育思想を再理論化することにある。本研究期間では、両者の特に戦前の思想に着目し、それぞれ西田哲学に関連づけて検討することで、第一に、現在まで教育哲学の領域で積極的に議論される「京都学派教育学」における木村と高坂の対極的な位置づけ、第二に、中央教育審議会答申・別記「期待される人間像」(1966年)以来繰り返されてきた高坂の思想に対する批判を再検討し、歴史哲学を基盤とした「京都学派教育学」の展開可能性と、無の思想に内在する問題性を考察した。以下、本研究の内容と成果を報告する。

2 研究成果

1) 戦後教育学における「京都学派」

京都学派の教育思想を論じるにあたり、まずはその前提として、戦後教育学においてこれまで「京都学派」がどのように論じられてきたかを明らかにした。本研究が主な検討課題とする高坂正顕と木村素衛は、ともに「京都学派の教育哲学者」として、戦後教育学においてそれぞれ重要人物に数えられてきたが、しかし両者に対する評価はこれまでほとんど交差することなく、区別して語られるのが一般的であった(村瀬2001, 田中2012, 矢野2013など)。というのも、これまで戦後教育学は、「期待される人間像」の議論にて中心的役割を担った高坂を、大戦時に「戦争協力」に奔走した「世界史の哲学」派、あるいは天皇中心の臣民形成を目論む「国家主義者」として論じ(船山1981)、たいして木村の思想に関しては、閉塞状況にある「戦後教育学」の視野を広げる「オルターナティブ」の可能性として論じてきたからである(大西1999, 西村2015など)。

そこで本研究は、1966年以後「期待される人間像」をめぐるなされた「京都学派」批判の文脈と、90年代以後「ポストモダン」思潮を経験した教育学が、再度積極的に着目しはじめた「オルターナティブ」としての「京都学派教育学」の文脈をそれぞれ吟味・検討し、戦後教育学における「京都学派」に関する議論が、西田をはじめ戦前・戦中の京都学派が主要な問題圏としたはずの歴史哲学に関する議論に、積極的に目を向けていないことを批判的に指摘した。(研究業績/単著論文1)

2) 木村素衛の教育思想における形成と歴史

第二に着目したのは、木村素衛の教育思想において中心的な概念である「形成」概念の歴史性についてである。先に明らかにしたように、これまで木村の教育思想は「戦後教育学」の「オルターナティブ」として、初期木村の著作をもとに「表現愛」や「美的人間形成論」の文脈において言及されることが一般的であった。しかしながら大戦中に執筆された主著『国家に於ける文化と教育』(1946年)において、木村は教育を国家歴史の問題として「国民教育論」を展開しており、森田伸子が論じたように、木村は西田哲学とともに田辺哲学における個と普遍の問題を継承しているため、彼の思想形成を理解するには、やはり国家の問題を十分に踏まえなければならないという(森田2015)。

そこで本研究は、戦中の木村にとってなぜ国家と国民の問題が必然であったかをさらに詳しく検証するために、西田幾多郎をはじめ、同時期の京都学派が共有したとされる歴史哲学の問題圏から『表現愛』(1939年)の議論をとらえ返し、同書に展開する「形成」概念の歴史性を明らかにすることを試みた。それによって、内と外の相即において自己を表現する「形成的主体」は、すべて伝統と創造の弁証法的媒介点として働く「歴史的形成的主体」でなければならず、彼のいう「形成＝表現」が、常に同時に「歴史形成」を意図して理論化された旨が論証された。ここに、木村の「表現愛」と京都学派との思想的な接点を確認できるとともに、歴史哲学の展開においても彼らが依拠した「無の思想」の問題性が見いだされる。今後の課題として、西田から木村に継承された「無」あるいは「空」の立場に立つ場合に、はたして「歴史」とはいかなるものであり、またそれを語る事が可能なのかという、京都学派研究における重要な問題を提起した。(研究業績/単著論文2)

3) 高坂正顕の歴史観

第三に課題としたのは、先に検討した木村が、『表現愛』にて歴史形成の問題に関心を寄せると同時

期に、おなじく歴史的世界の動力を思索の中心に据えた、高坂正顕の歴史観についてである。本研究期間では、『歴史的世界』（1937年）に展開する彼の「歴史的主体」概念について、西田哲学における「絶対矛盾的自己同一」の議論と対比的に検討することで、高坂の歴史哲学における「歴史」と「主体」の意味とその関係を明らかにした。西田哲学との関係で高坂の思想を検討するため、特に着目したのは、戦後の著書『人間像の分裂とその回復』（1963年）にて高坂が中心的に論じ、これまでも「期待される人間像」との関連を指摘されてきた「逆超越」の概念である（岩田2007）。本研究では、戦後まもなくの高坂が展開する「逆超越」の論理を、西田哲学との関連で論じるために、最晩年の西田が展開する「逆対応」の論理をその具体的な検討課題とした。

注目すべきは、どちらの場合も「主体」とは歴史によって作られつつも歴史を作り行くものとして「歴史的主体」でなければならず、それが自己を超越する「歴史的世界」との弁証法的関係において論じられる点である。西田においても高坂においても、人間はすべてその存在を歴史によって作られたものでなければならず、しかしながらそれは同時に歴史的世界を作ることにおいてはじめて主体であるといわなければならない。そして両者の思想的相違は、まさに歴史を「作る」の意味に見いだすことができる。つまり西田が理論化する絶対矛盾的自己同一の世界では、個物はどこまでも自己に死することにおいて絶対世界の自己限定的自覚点として生きるものであり、ゆえに主体が歴史を「作る」とき、それはすなわち死して「逆対応」的に絶対者に没する「無・主体」であるのでなければならない。対して高坂の場合をしてみると、主体はあくまで自らの知性にもとづいた決断と覚悟において世界に対峙する主体でなければならず、主体が「逆限定」的に世界に働きかけることがすなわち歴史的世界を作り、そのとき同時に主体も歴史的世界によって作られるという相互的な限定の理論が展開される。本研究では、ここに「主体」概念に関する高坂の歴史哲学の特徴を見いだしたうえで、教育理論として展開する可能性を考察した。（研究業績／単著論文3）

3 今後の研究課題

さて、以上の研究過程を通して新たに浮上した問題が、木村と高坂それぞれの思索における「主体」概念が意味するところの微妙な違いについてである。両者はともに、「形成＝表現」（木村）あるいは「逆限定」（高坂）によって歴史を形成する「歴史的主体」の思想を展開するが、高坂が歴史の運命（彼の言葉でいえば「傾向的必然性」）に対峙し、自ら歴史的世界を限定する「主体」の擁立を意図するに對し、木村の場合においては西田哲学の場合と同様、あくまで「主体」は歴史的事在の形成的自覚点として、歴史的事在なるものの意図を実現するいわば「無・主体」の論理を展開する。とすれば、ともに歴史哲学に関心を向けた両者の思索においては、「歴史」あるいは「歴史的现实」の意味するところもまた少なからぬズレが存すると考えられる。そのズレがもっとも顕現するのが、まさに大戦中にそれぞれが実際に経験した「歴史的现实」との対峙であろう。座談会『世界史的立場と日本』（1943年）に知られるように、戦中の高坂は、いわゆる「世界史の哲学」をもとに日本国家の世界史的役割を論じ、一方の木村は「国民教育」の正しきあり方として「世界史的国民形成」論を展開している。今後はさらに両者の戦中の議論に着目し、彼らにとって「歴史」とはいったい何であり、また「歴史的现实」とはどのようなものがあったのか、時局的発言も含めたその思想の具体的展開について、無の思想が抱える問題性に着目しながらさらにくわしく検討したい。

4 本プログラムにかかわる研究業績

単著論文

- 1) 山田真由美「戦後教育学における「京都学派」：政治的批判と哲学的再評価のあいだ」『人間と社会の探究』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，第80号，2015年11月
- 2) 山田真由美「木村素衛の教育思想における形成と歴史：形成概念の歴史性に着目して」『哲学』三田哲学会，第136集，2016年4月
- 3) 山田真由美「高坂正顕の歴史観：「期待される人間像」再批判のために」『人間と社会の探究』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要，第81号，2016年5月

研究発表

- 1) 「生きた道徳をいかに創造するか：高坂正顕の道徳教育論」日本道徳教育学会，第85回春季大会（東京学芸大学），2015年6月29日
- 2) 「高坂正顕の歴史観：「期待される人間像」再批判のために」教育史学会，第59回大会（宮城教育大学），2015年9月27日
- 3) 「京都学派の教育思想：西田幾多郎・木村素衛・高坂正顕」教育哲学会，第58回大会（奈良女子大学），2015年10月11日

引用文献

- 岩田文昭 2007「道徳教育における〈宗教性〉」国際宗教研究所編『現代宗教2007：宗教教育の地平』秋山書店
- 大西正倫 1999「木村素衛：実践における救いの教育人間学」皇紀夫ほか編『日本の教育人間学』玉川大学出版部
- 田中每実 2012『臨床的人間形成論の構築：臨床的人間形成論〈第2部〉』東信堂
- 西村拓生 2008「京都学派と美的人間形成論：木村素衛はいかにシラーを読んだのか」『奈良女子大学文学部研究教育年報』奈良女子大学文学部，第5号
- 船山謙次 1981『戦後道徳教育論史』青木書店
- 村瀬裕也 2001『木村素衛の哲学：美と教養への啓示』こぶし書房
- 森田伸子 2015「木村素衛における政治と教育：京都学派の身体論を問い直す」『人間研究』日本女子大学教育学科の会，第51号
- 矢野智司 2013「人間学：京都学派人間学と日本の教育学との失われた環を求めて」森田尚人ほか編『教育思想史で読む現代教育』勁草書房